

2023. 3. 19 「安芸バイパス開通」

八本松西 I C 周辺工事の変遷



初期

2019. 12. 29



開通後

2023. 3. 25

全通した国道2号線バイパス

約50年前のこと、転勤族だった私は広島で2年間営業職でした。担当区域は西条・本郷方面でした。その頃から国道2号線は渋滞していて、営業地へたどり着くだけで難渋しました。ある時、事故発生のため動けなくなり瀬野川の北を走る狭い道路（西国街道）に迂回したところ更なる渋滞となっていて、営業を諦めて会社へ帰った記憶があります。その頃からバイパスをつける噂が流れてはいたものの転勤のため広島を離れてその噂も忘れました。あれから50年の月日が流れて今年3月にやっと開通しました。

船越雄治

5月例会報告

東広島市の六地藏

5月例会は5月27日(土)13:30から東西条地域センターで開催され19名が参加した。

発表は、船越雄治氏が「東広島の六地藏」と題し市内8か所に建立する六地藏を紹介した。

「六地藏」には、諸説あるが、広辞苑では六道(地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道)において衆生(生命のある全てのもの)の苦患を救うという6種の地藏のこととある。六地藏は同サイズ、同仕様で形成され、6体揃って並んだ地藏を指す。サイズ、形成が異なる地藏6体が並んだものは六地藏にあたらぬ。

市内六地藏の所在地は、①豊栄町吉原番ノ木の県道28号沿いの山腹。立像、建立年 享和2年(1802)。※伊能忠敬が文化10年(1813)11月12日の日記に測量時六地藏が街道の左にあると記す。②志和町冠 南泉寺境内。座像、建立年 寛政12年(1800)。③高屋町県道351号沿い 八重垣神社境内。立像、建立年 宝暦10年(1760)。④西条町塔の岡 御建墓地。立像、建立年 不明(江戸時代?)。⑤西条本町 円通寺境内。立像、建立年 不明(江戸時代以降?)。⑥西条土与丸 大林寺境内。立像、建立年 寛政3年(1791)。⑦高屋町白市 木原家墓地。座像と立像、建立年 享保19年(1734)。⑧高屋町小谷大原地区の丘の中。立像、建立年 不明(江戸時代?)。以上、8か所の六地藏を資料や映像で分析しながら紹介、解説した。

伊能忠敬の測量の足取りや市内六地藏などの詳細は「東広島地歴ウォーク」2023.3.27発行 ¥1500 を参照されると東広島市の地理と歴史の一端がコンパクトにまとめられている。

<例会参加者(敬称略)>

国永昭二、三嶋昇、藤原美春、今田幸博、近藤英治、堀内幸子、船越雄治、光田清志、國松宏史、菅野晃行、赤木達男、吉村鈴枝、蔵楽恭子、谷本操、宍戸元文、近藤孝美、小田正之、吉田泰義、吉井良平(以上19名)

第37回「東広島の史跡・文化財を見て歩く会」を終えて

実行委員長 三嶋 昇

第37回「東広島の史跡・文化財を見て歩く会」は、4月29日(祝)に高屋町小谷で開催した。天候不順の中で、255名の方に参加していただいた

6月例会のご案内

日 時 6月24日(土) 13:30～
場 所 東西条地域センター
研究発表 「白市の俳諧遺跡」 浮田一民氏

た。開会式直前に、雨は強く降り始めたので、気が重くなるばかりであった。

地元住民による「一心太鼓」で、参加者を迎えるという幕開けとした。



そして、赤木会長の挨拶に続き来賓の紹介後、来賓を代表して川口副市長の挨拶があった。さらに、私がスケジュールや歩行時の注意事項をお願いする。最後に近藤さんによる準備運動で体をほぐして開会式を終えた。その後、私がスタートへの指示を行なう予定であったが、出口に殺到してうまく対応出来なかった。これは反省材料である。

体育館を出ると、すでに先導役の国永さん、谷本さんがスタンバイしていた。この頃雨が上がったので、ほっとする中で 予定より早めのスタートとなった。参加者を見送りながら全員が出発すると、開会式会場の体育館の後片付けを行う。その後は受付などの整理を手伝いながら、本部として待機である。

途中、小雨が降ったり止んだり、やきもきするばかりであった。やがて、第6関所の担当となる東広島ライオンズクラブの方々が、関所を作り始めた。毎年、最後の関所として昔ながらの関所を設けて、ゴールする参加者を迎えてくれるのであろう。ありがたいことである。さらに、2人が武士に仮装してくれていた。小雨が降る中なので、予定より大幅に早く、12時40分頃先頭集団が見え出した。

小学校のプール前で、谷本さんが最後の説明を行い、関所に向かってくる。その前でも出迎えながら「ご苦労さまでした」と言える喜びは忘れることが出来ない。関所を見て感動する姿に、歩く会の楽しさを感じることが出来た。記念撮影をしている参加者を見ると、降雨など忘れさせてくれる時間であった。約20分で、第1陣として120名くらいがゴールインした。が、第2陣の姿が全く見えない。待つこと約50分、ようやく歩いている集団が見え始めたので歓声上がる。

14時15分頃、ゴールに向かってくる。本部にいたスタッフと出迎えである。この中には市場

教育長や山田小谷小学校校長の姿も見えた。結果として予定より1時間くらい早く全員がゴールすることが出来た。今回も昨年同様に、雨の中での開催であったが、トラブルもなく終えることが出来たのは、何よりであった。



スタッフにおいては、備品等の撤収に素早く対応してもらったので、15時30分には、小学校内での作業を完了した。以後、分担して高屋堀集会所に運んで解散とする。

翌日、集会所に集まり、濡れていた旗等を乾かしながら収納していく。今回作った資料は小学校等で教材として使わせて欲しいとの申し出があった。これも嬉しいことである。よって乾かすときれいにして箱詰めして、一連の作業は無事に終えることが出来た。

皮肉にも前日の準備、本番翌日は好天気であり、本番の日のみ降雨という残念な天候となった。

しかし、当会会員の協力のほか、関所受付を担当していただいた協賛団体関係者、ボランティアガイドの会、さらには関所として場所を提供していただいた神社・寺院・施設関係者には感謝するばかりだ。また今回は地元のまちづくり協議会のバックアップの存在も大きな力となった。

40名の参加者からいただいたアンケートを見ると、歩く会を楽しみにしている方々も多いようである。参加者から「楽しむことが出来た」という言葉があった。開催する側としては、これ以上の言葉はないと思う。

初めて、責任者として運営に当たってきたが、失敗も多々あり、関係者にご迷惑をかけたことは否めない。でも、関係者の多大なるご支援により、イベントは成功したと思っている。昨年

11月より活動を始めて、色々な方と話をすることが出来た。これは私の財産として、今後の活動につなげていこう。最後に、お世話になった方々に深く感謝を申しあげたい。ありがとうございました。

【広島を歩いたベトナム象 2】 ベトナム象、旧山陽道に入る 赤木 達男

難関・関門海峡、“危機一発” 渡りきる

長崎街道から西国街道（旧山陽道）に入るには、海の難所・関門海峡を渡らなければなりません。通常、参勤交代の大名は城下の志井川から小舟に分乗して、小倉沖で待つ御座船に向かい、潮具合を見ながら海峡を渡っていました。

ところが3トンの象を小舟に乗せるとひっくり返ってしまいます。ましてや海上で大きな船に乗せかえることは出来ません。

右の囲みは岡山藩の「象御領内通候一件」に記録されている長崎奉行・三宅周防守から小倉藩主・小笠原遠江守（小笠原忠基）宛の先触れの写しです。

「御用象が江戸にのぼるにつき必要な物品、人馬を支障なく準備して欲しい。大阪までの旅は風雨の強い季節、大里からの船渡しは潮時も考えなければならず、2～3日の遅れはあるもの」と書かれています。

ベトナム象の旅を率領（注1）する小舳田（おへだ）八左衛門と小倉藩の役人が額を寄せ相談した結果、赤間ヶ関まで海路一里半の位置にある門司の大里（だいら）港まで歩かせ、大きな石を運ぶ底の平らな石船（注2）で海峡を渡すことになったようです。

狭く細長い海峡の潮の流れは約9.4ノット（時速17.4km）と速く、海流も複雑で日に4回も潮の流れが変わります。逆立つ波と格闘しながら赤間ヶ崎を目指したベトナム象一行は、恐らくずぶ濡れになり、幾度も転覆の危機に遭ったことでしょう。

三月廿三日長崎より之先觸米写
此度御用之象老足江戸江被差立候間、
入用之品并人馬無滞可被差出候、
大坂迄之泊付記之候得共、風雨強節、
或者大里三而之船渡夕時之考茂
在之候三付、自然二、三日之遅滞者

【西国街道(旧山陽道)の行程】^①

（諸文献を基に筆者作成）

3月25日 ^②	3月29日 ^②	3月30日 ^②	3月31日 ^②	4月1日 ^②	4月2日 ^②
大里湊→赤間ヶ関→ 下関 ^③	下関→長府宿→小月宿→ 吉田宿 ^③	吉田宿→小月宿→厚狭市宿→ 山中宿 ^③	山中宿→舟木宿→ 小郡宿 ^③	小郡宿→ 宮市宿 ^③	宮市宿→ 富海宿 → 福川宿 → 徳山宿 ^③
船+2.9km ^④	18.2km ^④	27.5km ^④	20.0km ^④	26.8km ^④	
小倉藩 ^⑤	長府藩 ^⑤		萩藩 ^⑤		徳山藩 ^⑤
4月3日 ^②		4月4日 ^②	4月5日 ^②	4月6日 ^②	4月7日 ^②
徳山宿→花岡宿→久保市宿→呼坂宿→今市宿→ 玖珂宿 ^③		玖珂宿→ 関戸宿 ^③	関戸宿→小方→ 玖波宿 ^③	玖波宿→廿日市宿→ 広島宿 ^③	広島宿→ 海田市宿 ^③
23.3km ^④		14.8km ^④	17.5km ^④	16.0km ^④	15.5km ^④
徳山藩 ^⑤		岩国藩 ^⑤	広島藩(芸州藩) ^⑤		

そのことは、小舳田八左衛門が下関から「象は殊の外、水を恐るるに付き、道中、船渡しは可能な限り回避す可し」と追触れを出していることから伺えます。

危機を乗り切って赤間ヶ関に上陸したベトナム象は、約3km歩き下関宿に入ります。

異常寒波のため下関で4日間足止めされ、3月29日に西国街道（旧山陽道）の旅が始まります。その行程は前表の通りです。

徳山藩主・毛利広豊候も見学

西国街道に入ったベトナム象は、長府藩を経て長州本藩から徳山藩へと向かいます。その様子が徳山毛利家文庫「御書出控」（下写真）に残されています。それによると、当初4月1日に徳山宿に着く予定だったようですが、小郡近辺で象が足を痛めてしまい、スケジュール変更を余儀なくされます。急遽、徳山藩は福川宿に象小屋を準備しますが、

この日は徳山藩に入らず宮市宿泊まりになります。

翌4月2日、象は徳山藩領に入ります。

ちょうど在国中だった第5代藩主の毛利広豊は、父（第3代藩主元次）の側室だった蓮性院や姉などと象の宿舍「御客屋」（注3）で待ち受け、見物したと記されています。將軍吉宗が求めた珍獣にどのような感想を持ったのか記述はありませんが、その大きさに驚いたことでしょう。

なぜ象は足を痛めた？その日の行程も謎

山中宿を小郡付近で足を痛めたということですが、どの辺りだったのか探ってみます。と言っても記録が無いのであくまでも想像です。4月1日の朝、山中宿を発ったベトナム象はこの日の宿泊地、徳山宿を目指したことになります。距離にして約12里の46.8km、通常のほぼ倍の距離です。

筆者にはとても信じ難い行程です。岡山藩に残る「象御領内通候一件」には、長崎奉行所の御触書が記録されています。「象一日の内に道程四里ほどずつ歩行仕り候」、「五里とハ歩行得不仕候由」と、象が一日に進むことのできる距離を4～5里（16～20km）としています。

さらに、「象一日に十里とは歩行計りがた（難）く候につき、本宿にてこれなき所にも止宿申す儀もこれあるべき儀に候」とあるように、

山中宿から12里先の徳山宿を目指したとは筆者には信じ難いことです。もしかすると、下関で足止めを食らった4日間を取り戻そうと無理して、象が足を痛めたのかも知れません。

山中宿から舟木宿の間に比高100mほどの舟木峠超えがありますので、そこで足を痛め、小郡宿辺りで痛みに耐えられなくなったのかも知れません。いずれにしても、徳山宿を目指したけれど、結果、山中宿から5里（20km）、通常の象の行程である宮市宿に泊まったということなのでしょう。

4月3日朝五つ時（午前8時頃）徳山宿を出発したベトナム象は玖珂宿、関戸宿、小方宿を経て4月5日に芸州広島藩領の最西端、現在の大竹市の玖波宿に入ります。

いよいよ芸州広島藩・玖波宿に入る

昨年11月19日、大竹市で開催された広島県郷土史研究会協議会大会に参加しました。大竹は旧山陽道と山陰道が交わり、瀬戸内海航路につながる要衝で古くから栄えた地です。福島正則が築き一国一城令（注4）で廃城となった亀井城趾（注5）、幕末期の第二次征長戦争（芸州口の戦い）の砲弾跡が残る西念寺などを巡りました。

下の地図は「電子足跡ルート地図：旧山陽道（西国街道）歩き旅」から引用し、写真や書き込みを入れたものです。旧山陽道は亀居城の南側を通るルートで紫色で描かれています。

県史協大会で講演された石田雅春・広島大学准教授は、「亀居城の築城当時は海岸線が城の南側近くまで迫り、西側は入り江が深く入り込んでいた。西（山口藩）の毛利への備えとして築城された目的から見て、城の北側を通る狭い山陽道で芸州侵攻を防ごうとしたと考えられる」と、赤線のルートを示されましたので、筆者が赤線ルートなどを加えました。



ベトナム象が旧山陽道を江戸に上ったのは亀居城が破却され100年余経た享保14年（1729）

なので、当時の西国街道（旧山陽道）は狭い北側ではなく、紫色の海側だったと思われます。

岩国藩の関戸宿と広島藩の小方宿の間には地図の下方に見るように「苦の坂峠」という峠があります。巖島神社の祭神である市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）（注6）が通ったおり、「えらや 苦しや この苦の坂は 金のちきりも 要らぬものを」と、あまりの急坂でこう呟いたことから名前がついたと伝えられています。苦の坂峠は、第二次征長戦争（芸州口の戦い）の激戦地にもなりました。

峠越えの様子は分かりませんが、長崎を発つて以来、幾度も難所を克服した賢いベトナム象は、さほど苦勞せず超えたものと思います。峠を超え程なく下ると小方のまち並みに入ります。象一行は、恐らく亀居城北側ではなく南側を通り小方宿に入ったものと思われます。

江戸時代、代々続いた割庄屋・和田家

現在のイズミゆめタウン大竹店北側に位置する西国街道筋には和田家長屋門跡が残されています。長屋門を潜ると芸州広島藩の家老で茶人、上田宗箇が贈ったと伝えられる「手水鉢」も残されています。是非、一度訪れてみてください。

和田家は元大内家の家臣で、江戸時代270年を通して旧佐伯郡21ヶ村の割庄屋（注7）を務め、第二次征長戦争時には、焼け出された村民の救済に尽くすなど、大竹市の復興・発展に多大な貢献をされた旧家です。その和田家には江戸期の古文書1万数千点が残されているとのこと。



和田家に残る手水鉢

小方宿にはベトナム象は泊まっていますが、“もしかすると、和田家文書に何らかの記録が残されていないか”と期待し、前出の広島大学・石田准教授にお尋ねしてみようと思っています。

次号で広島城下に入ったベトナム象を紹介します。

（注1）宰領：人や荷駄を輸送する際に、その監督・指揮をする人。ベトナム象の江戸輸送では、長崎代官・高木作右衛門忠任の配下である小舩田八左衛門と福井雄助の二人がその任に当たった。

（注2）石船：石垣などの巨石を運搬するのに使われた幅が広く船底が平らな吃水の浅い木造船。平田船・段平船・石船などと称され、80石積み、90石積み知られている。

（注3）御客屋：毛利藩には藩主のほか他藩大名、幕吏などの休泊に利用される施設として御茶屋、御客屋、本陣などがある。御客屋は藩外からの使者、巡検使、見使などの接待や休泊に利

用された。当時の御客屋は現在の山口裁判所構内にあったと伝えられている。

（注4）一国一城令：大名が住む城（居城）以外の、領国にあるすべての城を取り壊すように幕府が命じたもの。大名が大きな軍力を持つことを防ぐために、大坂夏の陣の直後の1615年に出され、大名の領国には城は1つだけとなった。

（注5）亀居城址：1600年の関ヶ原の戦いで敗れた西軍の盟主・毛利氏が山口（萩）に移封され、福島正則が広島城に入る。慶長8年（1603）、甥の福島伯耆守正宣に1万石を与え築城を開始、慶長13年（1608）に城は完成。しかし、築城から僅か3年、慶長16年（1611年）に破却された。その理由は明らかではないが、様々に思いを馳せることができる。

（注6）市杵嶋姫命：宗像三女神（むなかたさんじょしん）の1柱と言われ、アマテラスとスサノオの誓約（うけい：誓って約束すること）で生まれた水の神とされている。

（注7）割庄屋：士分に準じて郷士としての家格を付与されている者も多く、藩によっては扶持を与えられていることもあった。当時の郡村行政は代官・郡代の下、割庄屋・庄屋・与頭（くみがしら）などの村役人によって行われていた。割庄屋は代官・郡代と庄屋の間にある立場で、数ヶ村から数十ヶ村を一括支配し、年貢や諸役などの割り振り、指令などを行っていた。

【八本松探訪9】

吉川の竹内家（2/2）

天野 浩一郎

4. 明治～昭和期の竹内家

（1）吉川村の要職を務める

明治政府により施工された地方制度は、明治5年（1872）の「大区小区制（だいくしょうくせい：町村を大区・小区に再編成する）」、明治11年の「郡区町村編成法」などいろいろ変遷したが、吉川村の管轄に係る少長・区長などの要職は11代当主竹内努（つとむ：兵右衛門改め）氏が歴任した。

（2）地主経営

明治10年（1877）頃運用が始まった地租改正により米納が金納に変わり、土地の売買・質入れが容易に行われるようになった。また、明治15年（1882）頃の紙幣整理＝デフレ政策の進行により不況に悩む農民の土地売却は一層進んだ。

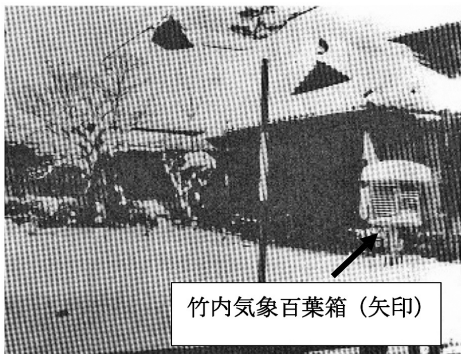
賀茂郡内の村々でも土地を手放す農民が増え、彼らの土地を購入した竹内家は明治20年（1887）には田畑50町歩余を所有し、明治28年（1895）には自作米と小作米を合わせた収入は662石余に達している。

このほかに、148町歩余の山林地主として松茸や用材・薪材の販売、製炭などの山林経営も

行っている。

(3) 農業発展と気象観測所・小作米の品評会
12代竹内遠（とおし）氏は農業生産の向上を図るため、品種改良・土壌改良・肥料管理などについて農事試験を行ってきた。

しかし、土地特有の気候の変化に応じて農事諸般を設計する必要性を考え、明治33年（1900）自邸内に気象観測所を設置する。毎日2～3回、温度・気圧・湿度・雨量・風速度・雲量・日照時間などが観測された。



竹内気象百葉箱 (矢印)

これらの気象観測のデータと農事試験の結果との関連性が評価され、評価結果は一般に公開されて地域の農業の発展に役立てられた。また、観測結果は毎月広島測候所にも報告され、遠氏が亡くなるまで37年間続いた。

また、小作人の農業生産を奨励するため、小作米の品評会を設けて優良者を表彰すると共に、優良米の出品陳列会と農事講習会が開催された。

(4) 吉川村信用組合の設立

遠氏は地方金融によって庶民経済の安定を願い、明治41年（1908）自宅を開放して広島銀行吉川支店を誘致し、自ら支店長となる。

同年、たまたま産業組合法が制定されたので吉川村信用組合を広島銀行吉川支店内に設置し、遠氏が組合長理事となり、金融・貯金・貸付の事業が始まる。やがて昭和23年（1948）、吉川村農業協同組合と改称される。

(5) 大嘗祭（だいじょうさい）の献穀田

大正元年（1912）に大正天皇の即位大礼が行われるに当たり、大嘗祭（天皇が即位後、初めて行う新嘗祭）に米を献上する献穀が竹内家に命じられる。

竹内家では邸宅前の田の中央3畝を仕切り周囲にしめ縄を張り巡らせ、正面に門をしつらえ地鎮祭を行った。そして、当家の者および作業者は白衣をまとい厳かに耕作作業を行ったが、これを見学するため近隣の小学校や西条農学校の生徒たちが多数参観に訪れた。

(6) 竹内農場と近代農業

竹内家は古くから農業を本業とし屋敷廻りの4～5町歩を自作し、常に7～8名の農夫を雇

い米麦作りを専業としていた。

大正12年（1923）、遠氏の長男・恭介（きょうすけ）が鹿児島高等農林学校を卒業して帰村したのを機に、農事的一切を行う竹内農場が発足する。恭介が場長となり近代営農が営まれた。

- ① 農地面積：4町8反余
- ② 畜産：耕作牛・乳牛・豚・鶏等
- ③ 作物：稲・麦・豆類・野菜・イ草・メロン等
- ④ 果樹園芸：梨・リンゴ・茶

昭和7年（1932）、戦時体制下となり竹内農場は廃止されることになる。



竹内農場産ラベル

(参考文献：「吉川村誌」「広島県史(近代)」他)

グループ研究会ご案内

第276回 古文書研究会

と き 6月20日(火) 13:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター
テキスト 「教訓道しるべ」②

第175回 石造物研究会

と き 6月27日(火) 13:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター

第176回 四日市町並研究会

と き 6月12日(月) 13:30～
ところ 歴史広場 吟古館

第66回 山城探訪会

と き 6月19日(月) 9:30～12:00
ところ 白市の旧跡(白市観光駐車場集合)

原爆資料保存研究会

と き 6月15日(木) 14:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター

6月の図書室開放

と き 6月16日(金) 13:00～15:00
ところ 高屋教育集会所

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース 第586号

令和5年（2023）6月5日発行
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男 TEL(082)423-7235

E-mail:akata@akata.dion.ne.jp

事務局長 國松宏史 TEL090-7979-6234

E-mail:kunimatsu402@hi3.enjoy.ne.jp

会報編集 間瀬 忍 TEL080-5756-2303

E-mail:mase shinobu@yahoo.co.jp